

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (12) (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

米国内でのロシア疑惑は晴れ、外交的には Trump 大統領は5月末に2度目の来日をするが、日米間にも貿易摩擦の問題がある。新元号「令和」のもと、日米首脳会談で懸案の貿易問題ではどのような「和」が保たれるのであろうか。

4月1日午前には本年5月1日からの新元号がこの「令和」と発表された。実は筆者はその瞬間から Basic ではこれをどう言うかを考えていた。そして‘Happy Harmony’が和気あいあいのニュアンスも出てよかろうと思っていた。その後、政府(外務省)はこれの公式の英語名称を‘Beautiful Harmony’とした。結果的には Basic で harmony は一致したが、beautiful であった。しかし beautiful より、やはり happy のほうが良いと思うがどうだろう。happy と harmony の初頭子音は[h]となり、韻も踏む。

beautiful は主観性が強く抽象度の高い概念で、C.K. Ogden と I.A. Richards もその共著 *The Meaning of Meaning* (1923) 『意味の意味』で beautiful の意味には特別に1章を設け説いてもいる。beautiful では実体が把握しにくい。beautiful harmony より happy harmony のほうが和も具体化し(和+輪 = 倭?)、意味的透明さも際立つ感じがするが、もう‘Beautiful Harmony’は Trump 氏にも伝わっているはずである。

happy は本連載(1)の⑥、(2)の②、(4)の②でも扱ったが、改めて言えば印欧祖語 PIE の etymon (語根音素形) は /KAP/ とされ、「獲物の頭を捕まえることのできる偶然の幸運さ」がそもそもの原義である。前回提示した同系語パノプティコン(PPE)〔仮称〕の Basic 語 **keep** と同系であるし、さらに **have, chief, receipt, able**、プラス α Basic 語 *cattle, capacity, purchase*、un-Basic 語 *happen, cap, capture, capital, cape, escape, chapter, chase, catch, etc.* と同系〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(2)参照〕。

また、**harmony** に関しては本連載(4)の②でやはり扱った。PIE etymon /AR/ に由来し、「つながり、結びつけられていること」が原義である。原音(root sound)と原義(root sense)からの語の把握であり上記、同系語パノプティコン(PPE)では Basic 語 **arm** と同系であるし **art, earth**、さらには語形・音形からはそう思われなくてもいいが **order** (命令・秩序・注文) などとも同系で、これらはすべてつながりを保つ調和の意味である。地球博覧会などの標語にもこういう一連の語がしばしば用いられもするが、連帯感や調和感を暗示する。プラス α Basic 語 *arithmetic* (算術・算数)、un-Basic 語 *article, arthritis* (関節炎) などとも同系〔同上拙著、第二部、例(31)参照〕。

ところで本連載の趣旨の背景には、より小さな単位からより大きな単位へ(逆に、より大きな単位からより小さな単位)となる①glosseme (言素) ⇄ ②phoneme (音素) ⇄ ③morpheme (意義素・形態素) ⇄ ④word (語) ⇄ ⑤phrase (句) ⇄ ⑥clause (節) ⇄ ⑦sentence (文) ⇄ ⑧text (テキスト) の見方がある。①の glosseme [glási:m] については後述するが今日、学界でも注目されていない。これは②の phoneme よりさらに抽象度の高いレベルのものである。

本連載では、言語の追究手法としての通時(diachronic) ⇄ 共時(synchronic)の両面から見ている。すなわち、言語学史的には PIE (印欧祖語) から追究する通時的な歴史言語学／比較言語学(historical linguistics / comparative linguistics)はもとより、衣食住を含めた人間社会の諸相を特に②～④の研究から原理的に体系づけたスイスの F. de

Saussure に端を発する**共時的**な構造主義言語学 (structural linguistics)、さらに句構造規則(phrasal structure rules)の適用により⑤～⑦の構造解明に貢献することとなったアメリカの N. Chomsky 風の**認知論的**な生成文法理論(generative grammar theory)、そして近年のポスト構造主義(post-structuralism)的なより単位の大きい⑧のテキスト分析(textual analysis)の手法などを視野に入れ、総括的な見方に立っている。

社会思想としてのポスト構造主義では言語に絶対的な意味はなく、テキスト解釈などは読み方によるとするが、これは文芸批評(literary criticism)にも一石を投じたことになる。では、神話の解釈はどうか？旧約・新約聖書の解釈となると、やはりベルギー生まれのフランスの構造主義思想家 C. Lévi-Strauss (C.レビストロース) 風の見方に注目したくなるが、興味深い問題へと発展もする。神話は実は数学の世界ともなる。

いずれにせよ、本連載では PIE から特に①～④を見ているという点では通時的でも、一方で②の音素の発見から言語を共時的に追った原点としての上記 F. de Saussure 風の構造主義言語学、そしてその後 (1930 年代) にアメリカのやはり構造主義言語学者 L. Bloomfield 風の直接構成素分析 (immediate constituent analysis : IC 分析) の手法も視野に入れている。彼は⑦を階層構造とし体系化した。IC 分析では文(sentence)を支配し構造を決定する原理として、意味的に近い 2 項ずつの階層構造(hierarchy)として見るのであるが注目されてよい。これは④～⑦のレベルで言えば語を 2 語ずつ一組に束ねることで、最終的には 1 つの文にする (「2」を「1」にする) 考え方である。

逆に⑦の sentence からこの IC 分析をつづけていくと、文の単位としての⑥の clause、⑤の phrase、④の word (接頭辞・語根・接尾辞) を経由し、意味を伝える最小の言語単位(minimum semantic unit)としての③の morpheme に至る。さらには②の phoneme(s) (音素(列) : phonemic sequence) のレベル、そして最終的には①の glosseme (言素) にまでたどり着くことになる。本連載での語釈では主として① ⇔ ④を見つても、①～⑧を統合しモノをコト化するテキスト単位までを射程内に入れている。

この① ⇔ ⑧で、①の glosseme は厳密には L. Bloomfield の後にデンマークの L. Hjelmslev (1899-1965) が提唱した glossematics (言理学・言語素論) {glos (= tongue) + sematic (= of signs) + s (= science)} 上の概念で、音素をさらに分析した言語の極小単位である。たとえば音素/p/ ⇒ /b+h/、音素/t/ ⇒ /d + h/、音素/k/ ⇒ /g + h/などのように、無声の子音音素を<有声の子音音素+無声の子音音素/h/>とするものである。いわば物理学での分子、原子、素粒子という物質の構成単位の見方とも重なる。

これによると音素/p/と/b/、音素/t/と/d/、音素/k/と/g/などが各々 1 つの音素に収束し、音素目録がどんどん減少していく。そして最終的には音素は人間という種(ヒト)の言語運用に関わる生体の一部としての器官(発音器官)での調音点(point of articulation)そのものともなり、「点」は抽象概念でこれが**言素(glosseme)**となる。

実際の発話レベル [パロール(parole)のレベル] で、英語では特に氣息音(帯気音)の[h](^h)は支配的に現れ英音を形成する中核になる音で、発音器官は声門(glottis)となる。また、特に米語では音が軟口蓋(soft palate)から鼻を抜け鼻音化[~]もする [一連のこのあたりを含めた社会学的な構造主義言語学のポイントは、拙稿「記号論と *Basic English* : 構造主義の視点から」研究紀要 No.14 (2006, pp.1-12)、また生成意味論の視点からは「BASIC ENGLISH と概念構造: 事象分析からの意味記述」同 No.11 (2003, pp.8-22)、「語彙概念構造と BASIC ENGLISH 言語の統語法」同 No.12 (2004, pp.1-12)、いずれも日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時) 発行など参照]。

なお、同じか違うか(same or different)という差異による 2 項対立(binomial opposition)の見方を背景にもする I. A. Richards & C. M. Gibson 著の *English through*

Pictures [元は I. A. Richards の単著で、書名 *The Pocketbook of Basic English* (1945)] も 社会思想的にアメリカ構造主義の時代 に世に出たことには留意されてよい。

言語は音声と文字など記号(sign)を介し伝わるが、話し手・書き手の意思が聴き手・読み手へ伝わる透過性(permeability)の問題も絡んでいる。社会的、構造主義言語学的に見た一記号体系である Basic 制御言語(Basic English as the controlled language)と絡め、語と語整序法を Trump 大統領の言説テキスト例で今回は1つだけ見てみる。語の意味は Basic 語を軸に同上拙著でまるですべて解き明かせられるが、それになかなか気づかれないと思えるので、毎回、内容を紹介する趣旨も兼ね示唆的に説いている。

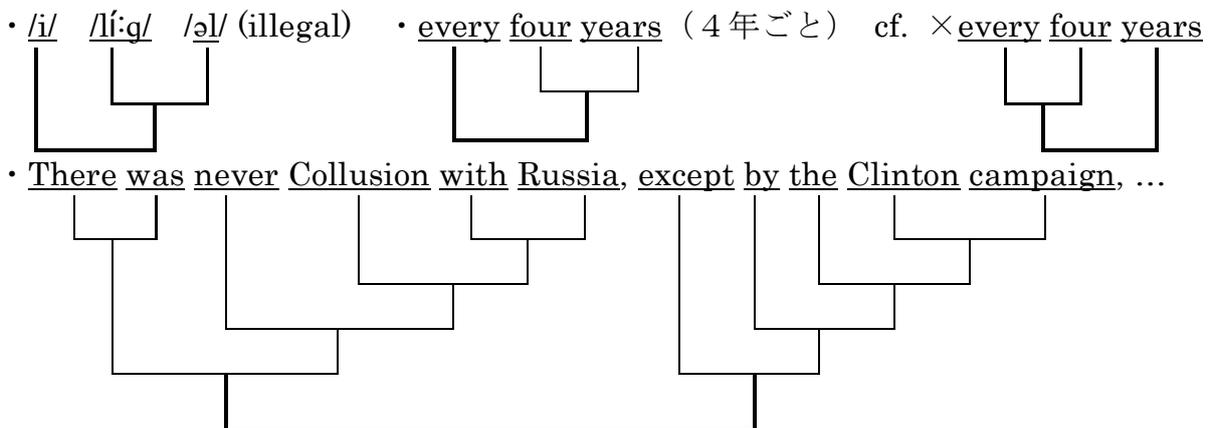
The illegal Mueller Witch Hunt continues in search of a crime. There was never Collusion with Russia, except by the Clinton campaign, so the 17 Angry Democrats are looking at anything they can find. Very unfair and BAD for the country. ALSO, not allowed under the LAW! (September 16, 2018)

▲モラー (マラー) 特別検察官によるロシア疑惑捜査は違法の魔女狩りで、共謀はクリントン側であるのに、17人の民主党議員が躍起になり調べていて米国にとりフェアでなくこれぞ違法だという内容であるが、これは彼の大統領就任当時からの一貫した主張であった。中間選挙(midterms)も前にこれをどう読むか?であった。

太線の語 illegal (違法の) は末尾の not allowed under the LAW で換言されている。illegal の語根部 leg は「掟」を意味する。同系の Basic 語 law は「低い」を意味する Basic 語 low、また un-Basic 語 lie, lay, etc.とも同系で「下にあり、ベース (基礎) となり、選り抜かれている」という語感をもつ。本連載前回に提示した「英語同系語パノプティコン:PPE」での selection と同系 [さらには同上拙著、第二部、例(87)参照]。

次の太線語 witch (魔女) の男性形は wizard であるが、これらは Basic 語 wise と同系である。wise には「魔力のある」のような意味的風味もある。PIE etymon の音素形は/WEID/とされ「見てとること」の意味で、この音形から多くの英語が派生した [詳細は同上拙著、第二部、例(67)参照]。なお、下線の文中 collusion (共謀) は[col (= together) + lu (= play) + sion] と形態素・意義素(morpheme)的に要素分解される。

以下に語 illegal {il (= not) + leg (= law) + al (= of)} の音素/意義素、句の1例で every four yeas (4年ごと)、また上の下線の文の IC 分析法の概略を示しておく。あらゆる文で次々と並ぶ2要素はすべて慣用的連鎖であり、この連鎖が1つに収束するのが意味の分かり方ともなる。



具体例は、拙著『基本語で考える英文整序法：語配列の手順』(2009) [松柏社] で 300 種の Basic 文例を通し扱っている。一定の英語力を測る手早い手法の1つのはずだろう。

